

フィニクスフヴォースト

艦船少女販売処

第一話

アイコールユアネーム

「ここは天国ですか」とヒンクストンが訊ねた。

「いいえ、ちがいます。」

ここはふつうの世界で、わたしらは第二の人生を生きているんですよ。だれも、わけは話してくれません。

でも、地球にいたときだって、なぜ生きているか、

そのわけをだれも話してくれなかったわ。

あなた方が住んでいた、あの地球でもね。

あの地球の前に、もう一つの地球があったかもしれない。

それはだれにも分りませんよ」

「まったくです」と、隊長が言った。

レイ・ブラッドベリ『火星年代記』より

至る場所から声が聞こえる。

けれども、ここには自分一人しか居ない。

ぎゅぎゅ、ぎゅぎゅ、ぎゅぎゅ、ぎゅぎゅ、ぎゅぎゅ、ぎゅぎゅ。

昼夜を問わず聞こえる笑い声。

怒鳴り声。

喜びの声。

勇猛な声。

悲壮な声。

冷静な声。

情熱的な声。

泣き喚く声。

愛を囁く声。

謡う声。

全てが、全てが耳に、脳に、魂に響き渡り、自分の声を見失っていた。

あつち、あつち、あつち、あつち。

一体自分は何処に居るのか、何処から来たのか、何処へ行くのか。判らなくなつて、曖昧になつて、滅茶苦茶になつて、裸足のつま先に冷たい感触を得て、我に返つた。

波の音。

目の前に広がるのは夜空。煌く月が昇り、星々が周囲をとりかこむ。目の前に横たわるのは海。昏い波が揺れ、風がその上を凪いでいく。いつの間ここに來ていたのだろう。今まで自分がどんな道を歩んできたのか、まるで覚えていかなかった。ただ、波の音を耳にしてから、さつきまでやかましく騒ぎ立っていた声が、ふつり、と途絶えたことに気がついた。

それは、実に数日ぶりに訪れた静寂で、耳に響く心地よい無音と、それを控え

めに割さく海の音に、自分の宿命を悟る。

あの声は、

あのたくさんの声は、きつと、

海だ。海が、呼んでいたのだ。

ざざ、ざざ、ざ、ざ、ざ。

気がついてしまえば、とても得心がいった。そうだ、話し声だと思っていたのは、実は波の音だったのだ。寄せては引くこのさざなみのように、こちらへ呼びかけていたのだ。

自然と、笑みがこぼれ出た。自分は呼びかけに応えて、こうして辿り着いた。

後はそう、すべきことはひとつ。自分もこの海の声に加われれば良い。それを実行するのは、もはや造作もないことに思えた。何故なら、既に目の前に終着点があるのだから。

ぎゅ、ぎゅ、ぎゅ、ぎゅ、ぎゅ、ぎゅ、ぎゅ。

だから、一步踏み出す。水の飛沫が足首を濡らし、大小幾つもの泡沫が生まれ、つま先から海の温度が沁み入っていく。

そして、

「見つけた」

全身を浸そうとしたところで、音が響いた。

ざざざ、ざざざ、ざざざ、ざざざ。

振り返ると、そこには、銀色に輝く影法師が立っていた。

「もうざざざ、ざざざ、ざ遅れのようにざざざ、ざざざ、ざ半分以上崩れざざざ、ざざざ、ざむしろよざざざ、ざざざ、ざり着いたものだ。夢中ざざざ、ざざざ、ざな、崩れた肩かざざざ、ざざざ、ざた鞆が落っこざざざ、ざざざ、ざないだなんて」

うるさい。

耳に音は入ってくるが、その意味するところはまるで理解できなかつた。

海の声のように明示的ではないその音は、ただの無意味な雑音としか思えない。

影法師は避けようと試みたようだが、それよりも一瞬早く、拳は着弾する。

「ふ——」

衝撃と、柔らかい感触。雑音が上がり、影法師の一部を破壊したという実感を
得る。

少しひいて確かめてみれば、影法師は双つあった目の片方を押さえて、残った
目でこちらを睨みつけている。

こちらの一撃は確実に相手の体を壊すことが出来る。そして一撃を入れてしま
えば、後は畳み掛ければよい。そのことを確信し、脳から全身へ響き渡る歓喜に
打ち震えながら、あ、から始まる声を上げて再び水面を蹴る。そして、今や硬い
鋼鉄の棒のようになった両腕を振りかざし、小さな、弱々しい生き物を叩き潰そ
うと飛びかかる。

「ん」

打ち下ろしの瞬間、身を沈ませた影法師が何かを言ったように聞こえた。

「ん」

視界に稲光のような白い閃き。

ぶつり、という何かが断たれた音。

気が付くと、景色が反転して、ぐるぐると視界の中を月が回る。

何が起きたのか判らず、ぐるぐる回る視界を止めようと身体を動かそうとするが、それよりも早く、ざぶんと何かが海に落ちる音が耳元で響いて、

それっきり、何も聞こえなくなつた。

2

——べにはなさかう
紅花榮。

旧暦の卯月、今の皐月の終わりにあたるその時期を、昔の人はそのように呼び習わした。紅花とは雅称を末摘花と呼び、古くは六世紀頃を遡り、大陸を渡って遠い西の土地からやってきたキク科の一年草である。

染料、または生薬として広く用いられたかの植物は、徐々に日差しが強まり、気温が上がって雨粒が大きくなり始めるこの時候に多く花咲き、鮮やかな黄色の頭状花をつける。そして夏が深まるにつれ、その色は艶やかな紅に染まっていく。潮は膝の上で展開させていたエアリアルディスプレイとキーボードを閉じると、涼風の揺らす木の葉のさざめきを聞きながら、構内の休憩所の一画に咲く紅花の群れが揺れる様子を眺めた。

濃い赤色を示す「くれない」とは、この紅花の和名「呉くれの藍あい」に由来している。古い日本語では、染め物に用いる染料のことを色に関わらず「あい」と呼んでいた。呉の国から伝えられた藍である故に、「くれない」。そうやってはじめは特定の何かを表していた言葉が、それ自身を含む大きな集合を示す言葉へ語義を変化させるのは、今でも多々見られる現象だ。

例えば「戦艦」とは、特に砲撃戦に特化した役割を持たされた、軍事用の艦船を示す言葉だった。しかし、世界を巻き込んだ激しい戦争が終わり、その存在が日常の中で語られなくなると、軍事用の艦船全てをさして「戦艦」と呼ぶことも珍しくなくなった。

同じ意味を持つ詞に「軍艦」があるが、「戦艦」という詞の「戦うための艦」という文字上の意味の解りやすさが、多くの人々の混同を助長したのだろう。言葉の持つ本来の役割は話者の意図を伝達することにあり、日常的に必要な概念にまで、語義の厳密性を求められることは少ないということだ。

しかしそうした軍事用の艦船を示していた言葉は、現在ではさらなる変化を遂げて、また異なった存在を示すものへと変貌していた。

八十年程前のある日突如深海から現れた脅威に立ち向う為、人類に似せて造ら

れた擬似生命体。自ら戦うことが出来ない相手との生存戦争に勝ち残る為、人類がその戦争の代理者として造った、有機的アンドロイドの一群。

その祖型となった存在はもつと無機的で、工業的で、無味乾燥なものだったと聞いている。そして元来は人類同士の戦争を代理させる為に創りだされたものだとも聞いている。それはしかし、新たな緊急の要請に従って、大きな方針の転換を余儀なくされた。

その結果、第一世代が運用されるようになってから半世紀も経つ頃には、その有機的アンドロイドの種類は、二十一世紀初頭の携帯情報端末の爆発的普及のよ
うに、理解を絶するほどの細分化を遂げていた。

その中でも「艦娘」と呼ばれる少女型アンドロイドは、他の同機種とは隔絶された価値を以って、その存在を社会に浸透させている。

ふねをかがみしわかきおとめ
舟を監みし少き女——艦娘。

この極東区域だけでも数千体は存在する彼らは、そのモチーフとなった軍事用の艦船と同じく、大まかに能力と役割に合わせた等級が振られていた。たとえば潮たちのような駆逐艦から始まり、軽巡洋艦、重巡洋艦、戦艦、空母、潜水艦等、他にも沢山の種別があるが、どの艦娘にも共通していることが二つある。

一つは、全ての艦娘がその精神基盤として「艦船の記録」を背負っていること。もう一つが、その容姿がどれも見目麗しい少女であるということだ。

近年になって深海からの脅威がその緊急性を失ってきたとはいえ、潮たちは元来、人類に成り代わって戦う為に生み出された兵器である。どうしてその兵器が少女の姿でなければならなかったのか。その経緯を把握している人は、今の世の中にあまり多くはないのかと潮は思う。

かくいう潮も、何故兵器である自分たちが、こうして人の形、それも少女の形をとることになったのか全く知らなかった。そもそも説明されていないのだから仕方がないのだが、深く疑問にすら思ったこともあまりない。

かつて艦娘の社会的立場が今ほどに柔軟性に富んでいなかった頃は、悩んだ末に心を病んでしまった者も多く居た。しかし戦争が長期化し、ある種当たり前として定着した現状に疑問を抱く者は、徐々に減っていった。人類が環境に適應することに長けた生き物であるのに倣い、その被造物である艦娘も自分たちと社会の關係に順応していった。

黎明期は「妖精機関」と呼ばれる研究機関の主導のもとで生産されていた艦娘も、今はその生産技術の安定運用が実現し、現在では民間企業において商業的に製造され、幾つかのブランドが確立されている。

各社は競い合うようにして美しく、強く、猛々しい艦娘を生産していた。そのことが艦娘の持つ他の有機的アンドロイドから隔絶した洗練性に拍車をかけており、社会が人類の対等な隣人として、彼らを一目置かずにはいられない理由を作っていた。

一説によれば、事実かどうかは知らないが、昔は男性型の艦娘のような存在も居たらしいと聞く。しかしどういいうわけか、現在残っているのは女性型のみだった。その理由として、艦船の記録との適合性だとか、生産効率が高いからだとか、そういったことが嘯かれているが、どれも眉唾の域をでない。そもそも、男性型が計画されたのかどうかという、確かな記録すら何処にも残されていない。民間企業に技術解放が行われた頃には既に、艦娘は少女の姿をしていたのだ。

突然、強い風が吹いた。膝に乗せていた軽量のカード端末が飛ばされそうになっ

て、潮は慌ててそれを押さえ込んだ。

南からの強い風が吹き込み、ものすごいスピードで雲が流されて、どんどん景色が変わっていく。蝉の声は聞こえてこない。それでも、後少しばかり時間が経てば、今度はどうしようもなく音に満ちた季節がやってくる。

製造されてからまだ二度程しか経験がないが、潮はこの季節がとても好きだった。

あれは昨年のことだったか。ひととき暑いお休みの日に、同室の漣と一緒に少しばかり遠出をしようと計画し、本土に訪れた時のことだ。

潮が通う扶桑記念学校は、今年で十周年を迎える艦娘専用の職業訓練学校だ。艦娘たちはこの学校で最低限の軍事訓練を受けながら、それぞれが持つ「個性」を確かめて、その上で軍属するか、そうでないかを選択することが出来る。そし

て基本的にその適性の見極めが終わるまで、つまり学校を卒業するまでは、学校のある島から出ることが許可されない。

かつて東京湾と呼ばれた位置に人工的に造られた「ヨコスカ」という名前のこの島は、五十年前の海面上昇の後に、国土防衛上の要として造られた研究要塞都市だ。「海色機関」と称する艦娘の軍事運用を統括する組織によつて運営され、島の出入りには厳しい監視の目が存在する。

だが、その監視の目にも、当然抜け道は有る。記念学校の先輩から後輩へ語り継がれる本土から訪れる定期運行の物資輸送船に密航する方法、それを何処からか手に入れてきた同室の漣という駆逐艦娘とともに、艀装を背負った艦娘が小突けばすぐに転覆してしまいそうな小型の船に乗つて、潮たちは本土に訪れた。

はじめに目に入ったのは、まばらに立ち並ぶ、白い背の高い建物だ。

海面上昇以来、海沿いの土地は居住制限が施されるようになった。そしてあまり平たい家に住んでいると、作為的に起こされた津波によつて浸水被害を受けてしまう。だから、どうしても海沿いに住まなくてはいけない境遇の人たちは、出来る限り棲家を高くして、上澄みの場所に大切なものを置いて暮らしているのだという。そうした不格好な背の低い灯台みたいな建物の間、手入れが長らくされていない舗装道路を、漣と一緒に歩いた。

どのくらい歩いたのかは思い出せない。ジリジリと照らす太陽の日差しで、吊り下げた水筒の水が、みるみるうちになくなっていつて、普段おしゃべりな漣もだんだん無口になっていつて、それでようやく目的地のお店に辿り着いた。

よく二年目の先輩たちが噂していた、美味しいスパゲティとケーキを出してくれるお店。その店主のおばさんと、新聞を読んでいたおじさんが、初めて本土

で出会った人間で、最後に出会った人間だ。

スパゲティとケーキはすごく美味しかった。おじさんとおばさんも、とても良い人たちで、潮たちが扶桑記念学校から訪れた艦娘であることを察して、色々と今まで店を訪れた艦娘に纏わる思い出話をしてくれた。

そこからさらに定期運行しているバスに乗っていけば、内陸部の台地に創られた市街区に訪れることも出来たのだが、船酔いと暑さで体調不良のピークに来ていた漣を慮って、その時はそのまま帰途についたのだった。

それつきり漣は懲りてしまったようで、その話題を出すと決まって面倒臭そうな顔をするので控えていたけれども、潮は配属が決まる前にもう一度行きたいと思っている。

記憶する限りの夏の本土は、そんなじりじりとした無音に満ちた場所だった。

あそこにはどうしようもないほどに存在感を示す静けさがあつて、息を潜めた気配がそこかしこに潜んでいる、そんな不気味さがあつた。

潮にとつての夏の印象は、あの場所の記憶が多くを占めている。だから夏が近づくと、わくわくする気持ちと同時に、潮は少しだけ孤独感にも似た不安な気持ちを覚えた。

予鈴がなる。午前の休憩時間が終わり、そろそろ次の講義が始まる時刻だ。

髪を揺らす涼風に名残惜しさを覚えながら立ち上がると、枝葉の間から、見知つた人影が目に入った。

「舞風ちゃん！」

思わず呼びかけると、その人影——舞風は立ち止まり、周囲を見渡し始めた。

こつちですよ、と手を振りながら潮が姿を現すと、彼女は、とん、とんと踊る

ようなステップでこちらへ走り寄り、そのまま勢いを殺さずに抱きついてくる。

「わっ、わっ、舞風、ちゃん。今日はどうしたんですか？ ……寝坊？」

とつさに半歩退いて勢いを殺しながら、受け止めた顔をのぞき込むと、至近距離で舞風はにへ、と破顔する。

「えへへ、まさかのそれ！ 私としたことがカンツペキに油断してたよねー。昨日結構早く寝たつもりだったんだけどさ。起きたら鼻はむずむずするし、いいことないよー」

潮は少しばかり頬が熱くなるのを感じつつ、悟られない程度に腕を伸ばして舞風と距離をとった。

潮はこの舞風という少女が好きだ。とてもあっけらかんとした表裏のない態度で、どんな時でも明るく人に接しようとする。その距離が少し近すぎて、時々そ

れを疎ましく思う人も居る。それでも誰かと話す時に一步引いてしまふ癖がある潮にとつて、そうしたコミュニケーションをとれる舞風は、憧れの存在でもあった。

「鼻がむずむず……つて、風邪か、何かですか？」

抱きしめる腕から解放されながら潮が問いかけると、舞風はんー、と大げさに首を傾げる仕草をとる。

「わっかんない。たぶん、お布団蹴つ飛ばして寝てたからかなー」

「最近あつたかくなつてきましたよね」

同じ組に所属しているので、そのまま二人で連れ立って次の講義室へ歩き始める。

「そーそー、いい加減お布団しまわなさいといけなかなーって思ってるんだけど
さ」

「もしかして、まだ冬のお布団なんです？」

「めんどくさくって」

「夏風邪、ひいちゃいますよ。今度お手伝いに行きましようか？」

「うーん、いいや。だって……わっ」

言葉と同時に角を曲がろうとした舞風が、突然声をあげてよろめいた。

咄嗟にその身体を支えようと腕を伸ばしながら何事かと潮が目を見開くと、二人の足元に、小柄な人影が尻もちをついているのが目に入った。

スカートから覗く、すらりとした白い足。癖のある銀の髪。

「ぶつかってしまったね……、すまない」

潮たちも決して背が大きい方ではないが、それよりもずっと幼い体格の少女。そんな見た目とは裏腹の、とても大人びた声色で告げながら、少女は一抱えほど

ありそうなスポーツバッグを担ぎ直して立ち上がる。

「……………」

対する舞風は、放心したようにその少女の顔を見つめていた。その様子に疑問を抱きながら、潮は代理で少女に謝罪する。

「あの、すみません。前をよく見ていなくて」

「前方不注意はお互い様だよ。それより、怪我はしていない？」

少女は落とした帽子を拾い上げ、それをはたきながら目深にかぶり、潮たちへ向き直る。そこで初めて潮は、その少女が左目に巻いている包帯に気がついた。

造顔技術者がそのフェイシズムの限りを尽くして生み出す、人間離れした端麗な容姿を持つ艦娘の中でも、目の前の少女は特に浮いた顔つきをしていた。

銀の髪に縁取られた顔に収まる白眉の下、颯になっっている右目は薄い蒼い瞳を

して、入念に磨きこまれた硝子のように、きらきらとした輝きを放っている。顔の半分を覆い隠す包帯さえも、痛々しさよりも、彼女の纏う神秘的な雰囲気**を**強めていた。

「それでは失礼する。 До свидания さようなら」

最後に聞きなれない言葉を発して、銀髪の少女は二人の前を去っていった。その後姿は少しぎこちなく、恐らく彼女は左眼を覆ってからまだ間もないのだろうと思われた。

「……あれ、誰、だったのかな」

「舞風ちゃん……？」

彼女が去ってから、ようやく舞風が声を発する。

「どうしたんですか、突然ぼうつとしちゃって」

「……なんでも、ないよ」

舞風の顔は、どこか痛みを堪えるような、そんな表情をしていた。理由が判らず戸惑いながら、潮は俯いてその手を握る。そしてふと、舞風の足元に落ちていく、光るものに気がついた。

どうやらそれは学校構内の簡易認証用に配布される学生カードのようだ。拾い上げて確かめてみると、そこには先ほどの少女の顔写真と「暁型駆逐艦・響」という名が記されていた。

その名を目にした瞬間、潮の心の奥底が、ざわりと揺れた。

暁型駆逐艦の響。半年前、この学舎にその新しい個体が編入したとは聞いていたが、間近で言葉を交わしたのは、今が初めての事だった。

目を閉じれば、「響」という名に関連付けられた記録が、まるで忘れかけてい

た本当の記憶がフラッシュバックするかのようになり、潮の意識に流れ込んでくる。それは、あの夏の本土の記憶と、そう大差のないリアルさを持つていた。

二十世紀初頭の精神分析家によれば、人間の精神的な成長には、幾つかの段階があるという。たとえば産まれたばかりの赤子は、まず自分を取り巻く環境が生存する為に信頼できるものかを問う。そこで安心を勝ち得た赤子は、幼児期・児童期・青年期・成年期・成熟期と段階を経るにつれて、自己承認、行為承認、他者承認、社会的承認の精神原型を、段階的に築き上げていく。

しかし、人間で言う「幼児期」が存在しない艦娘は製造された時から、既にある程度完成された「児童期」から「青年期」にかけて人格と感性を持つている必要がある。

本来じっくりと形成されるべき人格を急造する為には、その基準となる価値観

を精神の原型として置く必要がある。その為に一役買っているのが、当初は戦術的な用途のみを期待されていた「艦船の記憶」であった。

この社会で現在稼働している艦娘はいずれも、生まれながらにして二つの記憶を保持している。それは意識を持つてから連続する艦娘個人としての記憶と、彼らの前世とも言うべき「艦船の記録」だ。

その「艦船の記録」のルーツは、二十一世紀の半ば頃の記録技術分野の発見に遡る。

記録技術の追求の末、人類は液体分子に情報を書き込み、あらゆる出来事を「水」に記録させる方法を編み出した。液体記憶媒体と呼ばれたそれは、ハードウェアのさらなる小型化と、関連技術の進歩に大いに貢献した。

そうして人類は自身の能力限界をさらに拡張させたのだが、ある時何処かの時

間を持って余した資産家が、とあることを思いついた。それはこの技術を応用すること、この地球上に満ちている膨大な液体記憶媒体、——すなわち「海」から、何らかの情報を読み取ることができないか、というものだった。その突拍子もないアイディアは、彼の有り余る資産によつて、間もなく実行に移された。海に保存されている「地球の記憶」を抽出する。それは確かに浪漫に溢れた発想だった。初めの調査に選ばれたのは、マーシャル諸島の環礁地帯だった。美しい景観を持つダイビングスポットとして有名なその場所には、過去の兵器実験により、多数の軍艦が沈んでいる。いわば、軍艦の墓場である。そんな場所から、何らかの情報が抽出できたら、きつとそれは多くの人々の関心を惹くオカルティックなコンテンツと成ることは間違いない。

無論、調査に参加した誰もがその失敗を確信していたし、それでも何かの意味

ありげな音か、文字の配列でも得ることができれば、それはそれで向こう百年程度は作家たちのインスピレーションを刺激する程度の収穫にはなり得るだろうと、その程度の期待で調査は実行された。

だからはじめに抽出された情報から、明白な意味を持つ「声」が再生された時、誰もがそれを何かの間違いだと思った。だが、汲めども汲めどもその声は鳴り止まず、三度に渡り日が登った頃合いには調査隊の誰もが、その事実を認めざるをえなくなつた。

宝石のような海、そこにはその海を渡つた、その海に沈んだ、その海に揺蕩うあらゆる人々の、物の、事実の膨大な記録があつた。人類が文字を発明し、自らの文明を記録し始める遙か数十億年の昔から、海はあらゆる情報をその身に記憶し続けてきたのだ。

現在では「共有の記憶コモンメモリ」と呼ばれている膨大な記憶媒体たる海。艦娘は元来兵器として設計された有機的アンドロイドの一種だが、その彼らが他の同機種と隔絶された存在となっている理由は、そのコモンメモリからサルベージされた過去の戦闘艦船の記録をインストールすることで、海上戦闘への高い知見と同時に、アイデンティティを確立した明確な自我を副次的に得ていることによる。

勇猛果敢な戦果を残した艦娘は猛々しく誇り高い性格を持ち、存分に戦うこと適わずあえなく沈んでしまった艦娘は、それに起因するかのようにひねた性格を持つものが多かったりするように。その「船の記憶」には、軍事用の艦船としての海上戦術の経験的知識の他、その乗組員たちの嗜好や艦毎独特の規則・気風のみならず、彼らの家族構成や思想信条趣味嗜好好きなカレーの味に至るまで、多種多様な情報が含まれており、艦娘の人格基盤として大きな影響を及ぼしている。

艦娘に意志はあるのか、という問いはほんの二、三十年程前にも、お茶の間から研究施設に至るまで、盛んに議論された論題であった。潮たち艦娘当人にとつてしてみれば、それらの議論を目にすることはとてもむず痒く、落ち着かないものだ。自分たちは確かに自分という存在を認識し、思考しているつもりである。しかし、そのことを知っているのは自分たちだけで、外から見ても解らない。

けれど、それはたとえ人類であつても同じことではないか、と自分たちの造物主を思う。艦娘が自らの生体人工脳髓の生理化学的な反応をじっくりと観察したことがないように、彼らも自分たちの頭を開けて、その脳髓の存在を確かめた経験はないはずだ。きっと私たちと一緒に「確かに自分らしきものがある」ということ以上の確信を持つ者はいない。

そしてそんなこと、結局生活をする上では大した問題では無いのだ。たとえば

潮と漣が出会った本土の喫茶店のおばさんのように。彼女にとって艦娘と人類の少女の区別は、あまり関係がないようだった。

潮がその名と記録を背負う綾波型駆逐艦・潮は、かつて暁型駆逐艦・響と同じ水雷戦隊に所属し、ともに海上を駆けた仲間である。艦娘にとって、前世的な繋がり的事実が存在する艦娘というのは、やはりその他の娘と違って、特別な繋がりを感じる存在になり得た。

むしろ、殆どの艦娘はその前世的な記憶を、自身の記憶そのものとして認識し、その艦の生まれ変わりであるように振る舞うのが常だ。それこそが自身のアイデンティティとして定義されており、価値基準のすべてであるならば、それは当然のことである。客観的に見れば、「植え付けられた」としか言いようのない、そのあやふやな自己の定義を補強してくれる「今に生きる昔の友達」は、執着する

に余りある理由があった。

だから、潮にとって「響」という名は、特別な興味を惹くに十分なものだった。潮は、今すぐにも後を追いつがって名前を呼び、言葉を交わしたいという衝動を必死に抑えた。

「……潮ちゃんこそ、どしたの？」

一方の舞風は、既に落ち着いた様子だった。潮は少し迷ってから、響の学生カードを上着のポケットに放り込んだ。

「ううん、なんでもありません」

彼女が背負う艦船の記録、陽炎型駆逐艦・舞風にとっては、響はあまり縁のない艦船だ。だが、この舞風にも、かつてはとても特別な思いを寄せていた艦娘が存在していたのだ。そのことに考えが至り、潮は胸が締め付けられるような思い

に襲われる。

「ちよつと、考え事をしていて」

「そろそろ急ご、次の時間始まっちゃう」

首を傾げる舞風の手を握って横に並ぶ。

もしかしたらすぐに響が戻ってきて、落としてしまったカードを探して回るかもしれないという懸念はあった。しかし潮以外の誰かが拾い上げて、悪用してしまいかもしれない。そうなってしまうよりは、今ここで預かっておいて、後で渡しに行く機会を窺った方が確実と言えた。

あわよくば、そのついでに何か響と言葉を交わしてみたいという、ちよつとした企みを心に抱きながら。

3

片目が見えないだけでこんなにも不自由をするのだということを、響は生まれて初めて思い知った。

左目が塞がれていることで単純に左側が死角となる為、曲がり角や交差点では一度立ち止まって、向こう側から誰も来ないことを確認して通らねばならない。

また、これはよく聞いていたことだが、左右の焦点をあわせることができないので、目の前の光景の距離感が掴めず、今日だけでも三回は枝葉に顔を突っ込み、消毒液の匂いがとれないハンカチで顔を拭うことになった。

元々、退院するにはまだ早かった。医師からも左目が安定するまで、少なくとも今週いっぱいには安静にしているように言われていたが、響には悠長にしている時間はなかったし、ベッドの上で座っていると気が急いで仕方がなかった。だから保護者に黙って、無理をいって病院を後にしてきた。

それでも、曲がり角を通ろうとする度に尻もちをついては、流石に休んだ方がいいのではと思わざるを得なかった。おまけに学舎の敷地はところどころが編入した当初からずっと工事中で、少し目を離している隙に構内地図に載っていない仕切り板が増設されるような有り様だ。お陰様で退院と復学の手続きをする

為に事務所を目指していた響はすっかり迷ってしまった。

畳み掛ける理不尽に精神的な疲れを覚えて、響は視界に入ったベンチに腰掛けた。眼前では、紅花の群れがさらさらと風に揺れている。空を見上げると、太陽がそろそろ頂点に上り詰めようとしている頃合いだ。これからの予定を考えて、とりあえず一度寮室に戻り、抱えている荷物をおいてくるべきかと考える。

「……は？ 響？」

すると、突然自分の名前を呼ぶ聞き覚えのある声があった。

声の元へ視線を向けると、少し離れた場所で目を見開いた少女がこちらを見ていた。

白に近い銀の髪をまとめて結いた、響と同じかそれよりも背の低い娘。見慣れた姿を目にしたことで、響の心には急速に安堵感が広がり、笑みが零れ出た。

「御機嫌よう、朝霜」

言葉とともに手を振ると、どういうわけか朝霜と呼ばれた少女は眉を立てて肩を怒らせながら、大股開きでずんずんとこちらへ歩み寄つて来た。

「へらへらした顔で何が御機嫌ようだこのウスラバカお前いったいこの一週間何処行つてやがったんだ二日くらい姿みねえから聞いて回つたら寮長から入院したとか聞いてクソ驚いたのにその後も一つも連絡寄越しやがらねえしなんで同室が寮長経由でそのこと知るんだよアホかお前そうだなアホだなアホっぽい顔してるもんなあーもう！」

一息で捲し立てた朝霜は、ぜえぜえと息を整えながら響の包帯を睨みつける。

「……それで、なんでそんな怪我したんだ。顔にまで包帯巻くとか、えらい重傷じゃねえかよ」

「これはその、……転んだんだ」

「はあ？」

心底呆れた、というような顔をする朝霜。それを前にして、響はどうしたら良
いか判らず目を泳がせるが、そうしている間に彼女はどっかりと隣に腰を下ろし
た。

ベンチの上にあぐらをかくなんて器用なものだと感心している響の前で、朝霜
は懐から取り出した紙巻煙草を口に啣えて火を点ける。

「……まあ、いいよ。お前が話したくないってんなら、あたいだって無理して聞
き出そうとは思わないさ」

「朝霜の、そういうところが私は好きだ」

「うるせえやい」

煙を吐き出しながら、朝霜は片目にかかる前髪をかきあげた。ここ半年程度の共同生活で発見した、動揺している時、或いは照れくさい時にみせる彼女の癖の一つだ。彼女のその動作を見て心地よさを覚えながら、いつもの癖で懐にやった手が空をかいて、響は顔を顰める。

「どうした」

「いや、……：：：～酒が恋しくて」

「葉っぱでかわりになるかい」

「……：：：：：：：：：：：：：：～貫おう」

ほらよ、と差し出された紙巻を受け取って口に咥えると、顔を近づけて朝霜から火を貰う。煙を吸いこむと、じんわりと熱を持った大気が喉に、胸に染み込んでゆき、すうつと頭がすき通る気がする。

一週間かけて体に染み付いた消毒液の匂いが、紫煙に塗りつぶされていく。久しぶりの感覚に幾分か口寂しさが紛らわされて、響はようやくやく人心地がついた。

「……で、もう帰ってくるのか？」

「ああ。安心し給え、君の一人寝の夜はこれにておしまいさ」

「はん。お前が居なくなつたつてボトルの『響』ちゃんが居てくれるから寂しくねーよ」
「待て、まさか開けてないだろうね」

「あと一日姿を現さなかつたら泣きながら乾杯しようかと思つてたところだ」

「それは危ないところだ。なにせ私以外が開けたら爆発するようにしてあつたらね」

「抜かせ」

視線も合わせずに意味のない会話を交わしながら、並んで腹を抑えて笑う。

ルームメイトとはいえ、朝霜との付き合いは、実際の処まだ半年程度しか経っていない。それでもこの朝霜という娘は、顔を合わせた当初から積極的に響へ交流を図り、よく世話を焼いてくれた。

そういうのが好きな性分なんだと本人は語るが、内向的な性格で、あまり他者と接点を持ちたいとは思わない響にとつて、この娘は特殊技能を駆使しているようにしか見えなかった。

しかも元は朝霜は別の娘と同室だったのを、響が編入することになって急遽部屋替えが行われたのだ。そのストレスは小さなものではなかったに違いない。だが今となつては、朝霜はこうして傍に居て、とても心が安らぐ存在となつてくれている。恐らく、彼女の背負っている「朝霜」の記録が、そうした性格の原盤となつているのだろう。

煙草が短くなってきたところで視線を彷徨わせると、朝霜が無言で空き缶を差し出した。

それに「Спасибоありがとう」と告げて、その飲み口へ吸い殻をねじ込んで地面に置くと、物陰からさっと小さな人影が現れる。それは割烹着を着込んだ妖精だった。地面に置かれた空き缶を抱えようとしてよろける姿を、響はじつと見つめる。

彼ら妖精も、艦娘に先立って生み出された大いなる発明の恩恵の一つだ。特にこの島にはそこかしこに妖精が集い、人類や艦娘に成り代わって様々な雑務をこなしている。

彼らが対価として要求するのは、彼らや艦娘、他あらゆる物質を構成する微細資源と、エネルギーとしての電力だ。

一人では困難だと悟った妖精はすぐに仲間を呼んだ。そして二人組で空き缶を

持ち上げると、ドラム缶を運ぶ艦娘のようにえっちらおっちらと持ち去っていく。その後姿を見送って、響はベンチから立ち上がった。

「何処行くんだ」

「事務室。明日から講義に復帰したいし」

「わざわざ顔出ししなくちゃいけないのか」

「一応、簡単な身体検査があるんだ」

「勤勉なやつだなア、もう少し安静にしてろよ」

「朝霜こそ、あんまりサボりが嵩むとエースの名が泣くよ」

「自称だ、気にすんなよ。しかしお前は座学試験、いきなりパーフェクトだったじゃないか。今更何か学ぶことでもあるのか？」

「演習成績は下の下さ。訓練しなければならぬ」

「ふうん」

相槌を返しながら、朝霜もベンチを降りる。そして響の隣に並び立ちながら腰を屈めると、目を細めて響の顔を下から覗き込む。

「お前、まだ軍に行く気あるんだな」

その問いに、響は答えに迷って視線をそらす。

「職業選択の自由は艦娘にも認められている当然の権利だ。このご時世、好き好んで軍に入ろうなんて連中は、よつぽどの『悔い』を持つてるか、それとも演習成績だけが馬鹿みたいの良い奴、……あたいや磯風みたいな、戦うだけしか脳がないような奴らだ」

「別に軍に入らなくても、戦闘訓練は役に立つさ。それに軍属じゃなくても、いつか総動員の号令がかかるかもしれない」

響の反論に、朝霜は一笑する。

「艤装の運用なんて、娑婆に出たら何の役にも立たんさ。それに扱わない時間が長いほど、本当の基礎以外の技術ってのは錆びつくんだ。それより、介護や救護の技能の方が、よっぽど社会的な需要が厚いだろうさ」

「朝霜は、本当にリアリストだな」

「お前はいつもロマンチシストさ。煮え切らない奴！」

俯いて肩を落とした響の背をバシンと叩くと、朝霜は手をひらひらと振りながら先へ歩み出す。

「まあ、訓練ならいつでも付き合うぜ。対潜訓練ならもつと大歓迎」

「……朝霜は、前線へ行きたいのか？」

響の問いに、朝霜は歩みを止めて振り返る。

「勿論さ。それが、それこそが、あたいの存在する意義だ」

「戦う為、敵を倒す為、その為に？」

視界の中、振り返った朝霜は目を閉じて優しげな表情で、両手を胸に添える。

「そう囁くんだ。あたいの中にいる『朝霜』が」

その言葉に、響は無意識にスカートの裾を握りしめる。

「だから響も、ちゃんと『響』の声を聞いてやれよ。そして、よく相談して決めるんだ。それからでも遅くない。お前には『響』でなくてもいい権利があるんだからさ」

*

実際のところ、響は産まれてから現在に至るまで、ただの一度きりも『響』の声を聞いたことがなかった。

一般的に、艦娘は自身の襲名した「艦船の記録」を「声」という形で聴くときられている。この「船の声」と折り合いをつけるのに、艦娘は娘でなくてはならなかったのだ、という説もある。一世紀半より以前の船に乗っていたのは男たちであり、それを受け止めるのは、女性の自意識が都合が良いのだという。後付けだが、ある意味的を射ているかもしれないと響は思う。それくらい日常的に、艦娘は艦船の名を名乗りながら、同じ名を持つ船の声と対話している。

この世界にはじめての艦娘が生まれてから半世紀以上が経とうとしていた。当初は人類の敵と戦うための戦力の一つとしか捉えられていなかった艦娘だが、技術が発展し、生きている人類との境界線が曖昧になってくるに連れて、やがて人

類と同じように愛する人々が現れた。

艦娘は子を成すことは出来ない。それはその身体が妖精と同じ、フェアリースケイル微細資源と呼ばれる有機的な合成資源で構成された精密機械であるが故に、受け継ぐ遺伝子を持たない為だ。

だからたとえ人と同じ生殖器官を備えさせても、それは見せかけでしかない。そして彼らは基本的に生まれたままの姿から成長することも無い。それでも、人類の少女と同じ姿を取る彼らを、人類の少女と同じ情緒を持つ彼らを、人々は愛した。

そしてある契機を境に、戦うために生まれた艦娘に戦わなくても良い権利が与えられることになった。それはまるで、子を残すために生まれてきたはずの生き物が、愛のために死を選ぶように。その存在を揺るがす矛盾は、しかし不思議と

すんなりと艦娘にも受け入れられた。

軍隊に入るのを選ばなかった艦娘は、自らが宿している船の声と異なる名前を与えられ、学校で見極めた自身の適性にあつた仕事に付き、生活していくことになる。元艦娘として彼らの容貌と知識と身体能力は、社会の多くの場所で受け入れられている。

はじめは艦娘のイメージ戦略の一つとして始められた医療福祉分野や、高い身体能力を駆使したフィジカルトレーナー、ひいてはアイドルといったポップカルチャーの担い手に至るまで、その道は多種多様だ。

特に艦娘にとつても大衆にとつても大いに是とされているのは、医療福祉分野への道だ。確かに艦娘のような見目麗しい医師・看護師の存在は辛気臭くなりがちな現場へ華やかさを与えるだろうし、艦娘の中にはそうした役割を担った艦船

の記憶を持つものも多く、元より人類へ貢献するという題目の下に生まれてきた身としては、まさにうつつつけの職業選択として人気が高い。

勿論、さらに異なる道を選ぶものもある。中には人類の伴侶を得て家庭に入り、人工授精によつて生まれた子どもを一緒に育てながら幸福に暮らすものもある。

しかし同時に、再び艦娘に、軍隊に戻ろうとする者たちが大勢いることも事実だった。

一度は戦わない道を選んだ彼らが、何かに惹きつけられたかのように戦う道へ回帰してくる現象は毎年多々話題に上がっている。「船の声が呼んだ」と、戻ってきた艦娘は口をそろえていう。一度は離別したと思っていたものが失われずに残っていて、それが彼らの心を揺らめかせるのだ。

しかし響は生まれてからずっと、『響』の声を聞いたことがなかった。

どうやったら彼らのように、自分の在り方を決めることが出来るのだろうか。

響が『響』の声を聞くことができない以上、『響』であることを辞めるのは、とても難しいことのように思えて仕方なかった。それを切り分ける明白なものが、他と違つてははじめから備わっていないからだ。

はじめから失われていて、何も持つていない。

だからこそ、自分には何の可能性もない。

「……『響』でなくてもいい権利、か」

結局、朝霜に言われたことが頭から離れず、彼女が去った後もその場所であろうつと紅花が揺れるのを眺めていた。

何度鐘が鳴つたのかは解らない。いつの間にか、周囲には艦娘の姿が増えていて、お弁当を広げている。どうやらお昼休みの時間に入つたらしい。

事務所がお昼休みになると一時閉鎖されてしまうことを思い出し、開室時間を確かめるために、抱えていたスポーツバッグからカード型の端末を取り出してディスプレイを展開する。

着信の通知が何件か目に入った。その中の数件は保護者からのものだった。最後のひとつは留守電メッセージ付きだ。どんなことを言われるかは予測がついていたから、再生するのは躊躇われたが、聞かずに折り返し連絡を入れても、面倒になりそうなのは目に見えていた。

そうして迷っていると、まるでタイミングを見計らったかのように、着信のメッセージが表示された。その名前を見て、響は即座に応答ボタンを押した。

「……はい。こちら、フザオースト末端素子」

『こちら妖精機関・作戦司令部です』

響は周囲に会話が聞き取られないように立ち上がり、そして通話補助デバイスを耳にかけると、ポケットに端末を仕舞ってあてもなく歩き出す。

『御機嫌よう末端素子^{フザオースト}。その後、お加減はいかがですか』

通信補助デバイスから流れこむのは、甲高い、響よりもさらに幼い声だ。しかしその口調自体はとても落ち着いていた理性を感じさせ、非常にアンバランスな印象がある。

「左目が完全にダメになったから、交換してもらったよ。それと、結局今回もスカだったじゃないか。アレはもう駆けつけた時には半分以上崩れていたし、本来的に私が手を下すまでもなかっただろうに」

『不満そうですね。しかし万が一ということがありません。そうした事態を未然に防ぐ為、廃艦掃討隊は存在するはずですよ』

廃艦掃討隊。それは艦娘の研究と製造を主目的とする超国家組織・妖精機関の下部に置かれた、かつて確かに存在し、今は名目上は存在していない集団だ。

人工知能産業がまだ黎明の頃「フレーム問題」という厄介な課題が、技術者たちの頭を悩ませた。それは、人工知能が物事を『思考』するにあたって、それに関連して起こりうる全ての現象を含めて、無限処理に陥ってしまうというものだ。多くの場合、それは人工知能が「無視してよい事象」を選別できないことから生じていた。

そして艦娘の祖型となったアンドロイドも当然黎明の時期にこの問題に直面し、そして、それを解決する手段として採用されたのが、「船の声」だった。

艦娘の自我は、ハードウェアとしての肉体に宿る基礎OSに対して、海から抽出された「船の声」が流し込まれることで形成されている。その艦船の記憶は艦

娘にあらゆる経験的知恵を刷り込み、戦場における複雑な取捨選択、「戦術判断」を可能とした。

だが、そこから副次的に発生した艦娘の人格はいわば、二つの魂が混ざり合うことで偶発的に生じるものであり、その乱数を制御する術を未だ人類は持ち合わせしていない。

その為、いかにその肉体を調整したところで、自我が軍事行動に適性のないものに仕上がるが多々あった。故に第一世代の艦娘においては、生産された後、幾度かの運用試験の末に必要な要件を満たすことが出来なければ、初期化処理を施すか、解体して微細資源へ初期化することが、製造者の義務となっていた。

しかし民間に技術が降ろされて第二世代の艦娘が製造されるようになってから、一度自意識を持った「モノ想う者」に対して、そのような仕打ちを施すことを躊躇

踏う製造者が現れだした。結果として、検査要件を誤魔化した艦娘が出荷されたり、艦娘として製造されたはずが、他のアンドロイドに混じって社会へ流出したり、その容貌・身体能力へ着目した非合法的な社会組織に転用される等といった問題が多発するようになった。

それらの「非適性の艦娘」が引き起こす問題を解決する為、そして艦娘製造企業が自社製品のブランドを保つ為、各々の自慢の「同族殺しの艦娘」を持ち寄って結成されたのが「廃艦掃討隊」と称された妖精機関直轄の組織であったと言われている。

言われているというのは、どの艦娘製造企業も妖精機関も「廃艦掃討隊」の存在を公式に認めていない為だ。

一般的に、世界中のどの社会でも、艦娘を殺害することは、殺人に該当しない。

あくまで前提として艦娘は戦闘を目的とするヒューマノイドである。その認識は、たとえ艦娘が社会の経済活動の一端を担う割合が比較的多いこの国でも未だ覆されてはいない。

とはいえ、単純に殺し屋を彷彿とさせる集団の運営は、直感的・倫理的に受け入れがたいものであったし、実際、艦娘に纏わる問題解決を公に担っていた海色機関からは認可外の活動だった。それに穿った見方をすれば、艦娘の問題を艦娘に解決させるというのは、自身の手を汚すことを躊躇う者が、その役割を子どもへ押し付けるようなものだ。そんな後ろめたさに満ちた組織の存在を、決して公に認めるわけにはいかないだろう。

だが響は一度だけ、珍しく酒に酔った保護者が語って聞かせてくれたことを覚えていいる。彼女がかつては廃艦掃討隊のメンバーだったということ、幾人もの非

適性の艦娘をその手で活動停止させ、泡となって消えていくのを看取ってきたということ、だがその殺し屋稼業も、社会が艦娘へ提示する可能性が広がり、不要となったことを。

現在では廃艦掃討隊は艦娘に纏わる都市伝説の一つとして語られ、響の保護者も、経歴上は妖精機関の別部門に所属していたことになっている。

「……そんなことは先刻承知さ。けれどいい加減、湧いては潰す、というのを繰り返し続けるのも焦れてくるんだ。あれでもう、同じ症例は三隻目になる。今でこそご丁寧に一隻ずつだから良いものの、同時多発的に顕れたら始末がつかない」
現在響が追っているのは、否、追っていたのは、艦娘の失踪事件だった。

最近、誰にも何も告げずに姿を消す艦娘の数が上昇傾向にある、そのような妖精機関からの依頼でその足跡を辿っていた響は、つい二週間前に失踪する前の対

象に接触した。

しかしその艦娘はほぼ身体が崩れかけていて、響が事情を確かめる間もなく、その身体は声もないまま泡となって消えた。二件目も同じようなもので、三件目にしてようやく対峙するまでに至ったが、前の二例を受けて油断をした隙に、負傷してしまった。

『仰るとおりです。そしてその上で、妖精機関が貴女に御連絡をした理由に至るわけです。その三隻と対峙し、処理を取り計らった貴女に問いますが、何か共通項や手がかりのようなものに心当たりはありませんか？』

「……一つ、今回の対象で気になったことがある。解体した後、対象の所持品を改めていて不審なものを見つけたんだ」

『それは？』

「それが、よく判らないんだ。なんらかのデバイスだというのは見当がつくのだけれど」

そう告げて響がバッグから取り出したのは、平たい直方体の機械だった。

平面部分には長方形の窓のようなものがついており、内部構造を覗けるようになっていた。裏返すと、そこには小さなカバーが着いており、それを外すと旧式の円筒形バッテリーらしきものが入られるようになっていた。

側面には端末の音楽再生コントロールによく似た図形がプリントされた幾つかのボタンと、何らかの端子を接続するジャックがついており、三角形と四角形を組み合わせた図形が印刷されたボタンを押すと、平面部分がまるで口のように開き、何かを収める為のスペースが顔を出す。

「随分と古い、レトロデバイスなんだと思う。意匠を見る限り、解る人間が居な

いか、聴きこみをしようと思っていた」

『所持品には他に何か、メディアと思わしきものがありますか？』

「メディア？ ジェルチップとか？」

『いいえ、もつと大型で、固形のもです。例えばちょうどそのレトロデバイスに収まるような大きさと形状のもです』

「ああ……やはりこれは、そういうものなのか」

響は鞆を漁ると、今度はやはり平たい形状をした板のようなものを取り出した。板には二つの貫通穴が開けられており、その部位がダイヤルのようになっていて、ぐるぐると回すことが出来るようになっていた。そしてそのダイヤルを回すことで、側面の一つに露出している黒い光沢のあるリボンを巻き取れるような仕組みになっている。

響もこれらを見た時、恐らくこの穴の空いた板をデバイスの中に入れて使用するのだろうと見当はつけていた。ただ正体を見極めてから試そうと思っていたので、後回しにしていたのだ。

ボタンを押してデバイスの口を開くと、板を差し込んでみる。かくして形状がぴたりと合い、そのまま口を閉じることが出来た。ぱちん、という小気味良い音がする。

「とするとこれはメデイアと、その読み取り機というわけか」

『仰るとおりです、フゾオースト末端素子。それはカセットテープと呼ばれるメデイアと、それを再生する為のデバイスです。カセットテープは二十世紀の半ばに発明された、音声を磁気情報に変換して保存するメデイアです。その発明により、人類はそれまでよりも多くの音声を記録し、複製し、加工することが可能になりました』

「コモンメモリのご先祖様みたいなもの、かな」

『その理解は端的では有りますが、概ね間違っています。磁気情報によるデータの保存から、人類の記録技術は目覚ましい進歩を遂げ、コモンメモリの発見から情報の外部化容量を爆発的に増加させ、現在に至っています』

「じゃあ、このカセットテープにも、音声データが保存されている？」

響はデバイスの表面に設けられた『窓』を覗きこむ。そこから内部に収められたテープのラベルが確認できるように設計されているらしい。少し変色したプラスチックの向こうに「ヴォイスインブルー」という、油性塗料に抛る少女のものと思われる走り書きが読み取れた。

Voice in Blue

「青の、声……？」

楽曲のタイトルか何かだろうか、色々と知識と記憶を辿ってみるが、該当する

ものは思いつかなかつた。

「どうやったら聞くことができるのかな」

『携帯タイプの再生デバイスには音声出力のジャックが設けられており、そこに出力用のインターフェースを接続することで、記録された音声を聞くことが出来ます』

「有線？ 無線ではないんだね。ああ、もしかしてあれかな」

流石に手が足りなくなってきたので足を止めて、人気のない近場の階段にハンカチを敷いて腰を降ろした。そして再び鞆を漁り、ぐるぐる巻きにされたコードの塊を取り出した。解くと片方は鈍色に光る端子、そしてもう反対はおはじきのような楕円形状の表面に、無数の穴が空いたパーツがついている。響が端子をジャックに挿すと、またもやぱちり、という音がして固定される。

『後はスピーカ部位を耳に入れ、再生ボタンを押して下さい。コモンメモリと同じ、横向きの三角形の図形が印字されているはずですよ』

「ちよつとくすぐつたいな、これ」

通話補助デバイスをずらしてスピーカを両耳に入れると、響はどきどきしながら、再生ボタンを押した。

『いかがですか』

「……………」

何も起こらない。

もう一度ボタンを押してみるが、最大限に力いっぱい押し込んでみても、うんともすんともいわなかった。

「……………バッテリー切れか、もしくは故障しているみたいだ」

『左様ですか。それでは妖精機関へテープをお預け下さい。内部に記録されている情報を解析し、結果とともにお返し致します』

溜め息を吐きながらスピーカを取り外すと、妖精機関はそう提案した。正直、響は自分の耳で記録された音声を聞いてみたくてしようがなかったが、事は一刻を争う事態でもあったので、ここは素直に従うのが賢明だと感じた。

「解った。受け渡しはどうしたら良いかな」

『いつも通り、構内に設けられている集荷ボックスに投函して下さい。妖精機関が回収に参ります』

「テープだけでいいのかな」

『一旦はそのように、再生デバイスは貴女の情報収集に用いると良いでしょう』

「了解、ではいつも通りに」

通話が終わり、端末で時刻を確認すると、丁度お昼休みの終わりに差し掛かる頃だった。このカセットテープを集荷ボックスへ投函し、その後、人に捌けた食堂でお昼を食べれば、無駄なく事務所で手続きが出来そうだ。

響はハンカチを畳んで懐にしまうと、食堂があると思われる方向へ歩き始めた。